

ネイチャー高知

No25 2005年8月20日発行

浦戸湾干潟の生き物観察会 報告

三本 健二

日時 2005年6月5日(日) 10時30分～12時30分

場所 高知市弘化台東側の干潟

この観察会は、2年続けて雨天中止だったが、今年やっと天候にめぐまれた。参加者は大人4人、スタッフとして坂本代表世話人と私、計6人で弘化台の東に広がる干潟で貝やカニなどを観察した。

内湾河口の汽水域に位置するこの干潟は、淡水と海水が混じりあい、潮の満ち干によって水中に沈んだり、水上に出たりを繰り返す場所である。川と海が出合う所であるとともに、陸上と水中の境とすることができる。

干潟のやや北寄りにチャートの岩場がある。まず、そこで岩に付着した生き物を観察した。岩の高い位置にはシロスジフジツボ、水面に近い位置にはマガキ、コウロエンカワヒバリガイなどが付着し、上下のすみ分けが見られる。潮の満ち干のために、岩の上部と下部とで水面上に出ている時間が異なるから、乾燥に耐えられる時間などに応じて、生物が付着する位置が異なる。こうしたすみ分けのようすを「帯状分布」と言う。

岩の下部に付着しているコウロエンカワヒバリガイは、イガイ科の二枚貝である。コウロエン(香栢園)という兵庫県の地名がついているが、オーストラリアやニュージーランド原産の帰化種である。この二枚貝がおびただしく密集して生息しているようすを観察した。

コウロエンカワヒバリガイが付着する部分やその下位には、殻が白いアメリカフジツボがたくさん見られる。これも帰化種で、原産地は南北アメリカの東岸(大西洋)である。巻貝ではカノコガイがおびただしい。

岩場から干潟に目を移すと、そこかしこに海草のコアマモが生えている。浦戸湾の汽水域にはコアマモは多い。泥の表面に目を凝らすと、3mmくらいの小さい巻貝カワザンショウガイが這っている。

干潟の泥を掘ってみると、表面のすぐ下からは汽水にすむシジミ類(ヤマトシジミ)が出てきて、数cm下の所からはソトオリガイという二枚貝がたくさん出てきた。ソトオリガイは長い水管をもち、その先端は干潟の表面に達しているから、そこに穴があいている。浦戸湾では希少なハザクラという二枚貝も、参加者によって1個体確認された。カニではマメコブシガニが見つかり、横歩きせず前に歩くようすを観察することができた。

干潟の最も北(青柳橋の近く)まで行った坂本さんは、オキシジミを見つけておられた。これはシジミの仲間ではなくアサリなどの仲間である。

参加者の一人からは、むかしこのあたりに「カラスガイ」がいたというお話を聞くことができた。大きな黒い二枚貝だという。この話は、以前にもどなたかに聞いたことがある。高知の方言で「カラスガイ」と言えばドブガイだが、ドブガイがこんな汽水域にすむとは考えられない。それでは何なのか、ぜひ知りたい。私にとっては謎を残して、観察会を終えた。

(付記)

1 コウロエンカワヒバリガイが日本で初めて確認されたのは1978年とされている(下記文献)。浦戸湾では、私は1981年に全域でおびただしい数を確認しているのので、日本の中でも早い時期から定着していたのだろう。

木村妙子, 2000. 人間に翻弄される貝たちー内湾の絶滅危惧種と帰化種ー. 月刊海洋号外 No.20:66-73.

2 アメリカフジツボが日本に渡来したのは1963年の可能性が大きいとされている(下記文献p. 89)。浦戸湾での1960年代、1970年代の記録は入手できていないが、1981年には全域でおびただしい数が見られたのを確認している。

池谷仙之・山口寿之, 1993. 進化古生物学入門. 東京大学出版会

浦戸湾の今昔



1953 (昭和28) 年

現在

山屋の植物探し

坂本 彰

山に登っていると、思いもかけない植物に出会ったりすることがある。それが新しい発見になったり、これまで定説とされていたことと違った結論を導き出すことになると、山屋の観察眼も結構見捨てたものではなくなるから面白い。

今年(2005年)7月30日31日と、徳島県剣山・一の森に登ってきた。所属する山の会の恒例となった山行で、目的はキレンゲショウマを中心に、剣山の夏の花を楽しむこと、そして、一の森ヒュッテで冷えたビールを飲むことである。

今年の剣山のキレンゲショウマは最悪であった。花の時期に少し早かったこともあるが、ニホンジカの食害がひどく、登山道脇のキレンゲショウマが大きなダメージを受けたことによる。食害を受けているのはキレンゲショウマに限らず、というより、ニホンジカが食べないごく一部を除いて、大半の草本類が影響を受けている。途中で剣山の環境保全に務められている新居綱男さんにあつて立ち話をしたが、ニホンジカのことを「あの仔らは・・・」と表現しつつも、困った様子であった。ニホンジカによる食害は、三嶺周辺など高知県側でも被害は深刻になるばかりであり、早急な対策が求められている。

話がそれかけたが、今回のテーマはキレンゲショウマやニホンジカの食害についてではない。翌日(31日)に見つけた「ミノボロスゲ(又はその近縁種。以下「ミノボロスゲ?」と書く)」の話である。これが生育していたのは、剣山頂上、三角点の数メートル北側の笹原の縁である。実は、このミノボロスゲ?7月の17日に、ボランティアとして参加している植物調査において、綱附森西側の登山道で見つけて採集し、牧野植物園で同定した結果、「ミノボロスゲ又はその近縁種で、四国新産ではないか」との結果を得ていた。(その後、徳島県立博物館の方からの情報では、剣山頂上のミノボロスゲは2年以上前、徳島県植物研究会の方によって確認されているとのことである。)

植物図鑑によると、ミノボロスゲはカヤツリグサ科スゲ属の山地に生える多年草で、叢生して株を作り、葉は根生で細く、深緑をしている。花期は5月から7月で、分布は北海道、本州とされている。

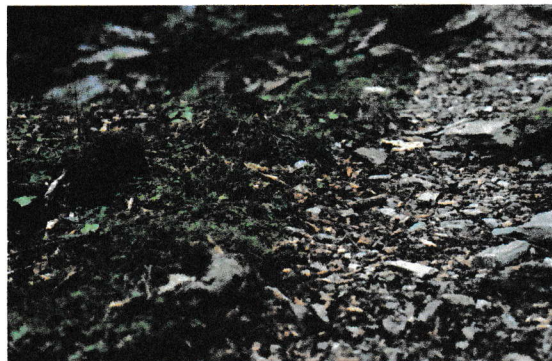
四国にはないとされていた植物が、ここ数年の間に剣山と綱附森で相次いで確認されたことになるが、これはなぜだろうか?綱附森西の登山道は、10年ほど前に県境にそって笹原を刈払い整備したコースであり、そこに生えている植物が調査されていないことはあり得るであろう。しかし、剣山は、独特の植物相をもちこれまでたくさんの方が調査をされており、生育していたにもかかわらず確認されていなかったとは考えにくい。人為的に持ち込まれたのか、休眠していた種子がなにかの拍子に発芽したのか、剣山と綱附森の関係は・・・と推測を巡らすと楽しくなる。いず



れにしても、もう少し情報が欲しいところである。ミノボロスゲ?は名前も良くないし、色鮮やかな花を付けてもおらず、全く目立たない植物であるが、7月から8月にかけて、稜線の笹原を歩く方には、是非とも注目をしていただきたい。

もう一つ、イネ科のムカゴツズリもひよ

んなことから調べはじめた。2001年5月5日に妻と二人で三嶺に登った。コースは、光石登山口からフスベヨリ谷に頂上に登り、カヤハゲを経てさおりが原に下り、西熊林道を光石に戻ってくるという、春の花を満喫するルートである。この時、さおりが原で休憩した東屋の周辺に生えていたのが、スズメノカタビラを貧相にしたような弱々しい植物であった。採集用具も持っていなかったが、簡単に掘れるところに沢山あったし、当時務めていた牧野植物園には、こんな面白くない草の標本を喜ぶ職員もいたので、採集して持ち帰った。イネ科の植物は同定するのが面倒だが、この植物は稈の基部(図鑑にはこう書いてあるが、素人が見ればどう見ても根の部分)に球形状の塊が数個あり、簡単にムカゴツヅリであることが分かった。同時に、高知県レッドデータブックでは絶滅危惧 I Bに位置づけられ、多くの図鑑に「希に見る」とか「まれに産する」とかの記載があることも分かった。「さおりが原にあんなにあるのに…」と思いつつ、世の植物学者の方(それも一人でなく)が、「まれに見られる」というものがさおりが原に沢山あるのはなぜだろうか、さおりが原だけのことだろうかと思い、5月に三嶺に登る度にチェックしてみた。



これまでの観察結果では、三嶺周辺では、フスベヨリ谷コース、カンカケ谷コースいずれも、登山道脇にごく普通に生育しており、また、さおりが原からカヤハゲに至るコースでも普通にあった。さおりが原の東屋の周辺は特に多く、大げさに言えば「鎌でかるほど」生えている。生育している範囲は、堂床から標高1,400m位までで、環境としては林内・沢沿いの土砂(土や砂というより建材の「ビリ」ぐらいの大きさ)が堆積している場所では、普通に(特に探さなくても)見つけることができた。5月は三嶺以外の山に登ることが余りないので断定はできないが、県内の他の山でも生育環境が似たような場所には、それほど珍しくもなく生えているのではないだろうか? これももう少し情報が集まれば、定説を覆すことができる。

(写真説明 3ページ下段 ミノボロスゲ?花穂 4ページ上段 ムカゴツヅリの生育場所 4ページ下段 ムカゴツヅリ)

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

No25

事務局 高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰方

TEL&FAX 088-850-0102

E-MAIL akira@baobab.or.jp